

## 共に運動とのかかわりを深める体育科授業の創造

阿部大亮 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Creating physical education classes where students strengthen ties through group exercises

ABE Daisuke

キーワード：育成したい資質・能力の明確化、知識及び技能の状態の明確化、単元構想、課題を連続させていく指導方法

### 1. 実践の背景

これから子どもたちが生きる時代は、人工知能の飛躍的な進化に伴い、様々な人間的な活動が代替され、生活、労働のほとんどが人の「身体」から乖離していく状況となる。このような時代において体育科教育では、これまでも大切にしてきた他者と協働して課題解決を行っていく過程の中で、できる喜びを味わわせることでなされるこれまでできなかったことができるようになるといった身体性の拡大やその過程における他者とのコミュニケーションを媒介とした仲間作りを通して、社会性の育成がより求められている。

学習指導要領の改訂に伴い、小学校体育科学習指導においては、習得した知識や技能を活用して課題解決することに課題があることが指摘されている。これらの課題を踏まえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するために、共生の視点を踏まえながら自己の運動課題の解決に向けて、他者と対話し協力して課題を解決する学習を引き続き重視することが示された。

本校では、これまで体育科の特質に応じた見方・考え方を働かせた深い学びを展開していくために、発達の段階のまとめりやこれまでの研究を基に、以下のように小学校段階における見方・考え方を整理した。そして、「どのような位置に動けばよいか」等といった解決の視点を持ち、目指す動きと課題となる動きを比較しながら解決に向けた考えを見だし、運動に挑戦し続けることで動きを高める学習指導を行ってきた。

【体育科の特質に応じた見方・考え方(小学校段階 ※本校研究の成果から)】

【見方】友達とかかわりながら「わかる」「できる」楽しさや喜びを味わうための課題把握・解決の視点

- ・運動の特性の側面・・・タイミング、力の入れ具合、方向、位置、姿勢
- ・スポーツの価値の側面・・・公正、協力、責任、安全

【考え方】視点によって捉えた課題等から解決するための考えをもつ

- ・目指す動きと課題となる動きを比較する。
- ・課題を基に解決するための方法を選ぶ・工夫する。
- ・これまでの自分と成長した自分とを比較し、成長したこととその要因を関係付ける。

このような研究を通して、表1のような子どもの姿が見られた。

表1 これまでの研究を通じた成果と課題及び課題の要因

成果	○ 他者とかかわりながら見方・考え方を働かせ、動きを高めようとする姿 ○ 運動の特性に触れ、できる喜びやわかる楽しさを味わう姿
課題	① 新しい運動課題に出会った際に、学んだことを生かしながら運動課題の解決を行うことができない姿 ② 自分の考えを伝え合う場において、自分のできている動きの動きのポイントを他者にうまく伝えられない姿 ③ 課題解決がうまくいかない際に、粘り強く取り組むことができない姿
課題の要因	① 新しく出会った運動課題を既習の知識や技能を活用しながら解決していくことのよさを十分に実感することができていない。 ② 自分のできている動きの動き方が、動きのポイントを関連付けて十分に理解されていない。 ③ 自分なりの運動課題が明確にもっていないことや課題解決への見通しが十分にもっていない。

## 2. 実践の方向

これらのことから、これからの体育科授業においては、これまで以上に子どもたちに運動のおもしろさや魅力に触れさせながら、学んだことを生かして動きができるようになる喜びを味わわせる必要がある。また、その過程の中で、他者とかかわりながら課題解決の方法を思考し、仲間同士で励まし合い、粘り強く運動に取り組み続けることのよさを実感させていくことも大切である。このように、できた喜びや他者とかかわるよさを実感することで子どもたちは、自らの身体性を拡大しつつ、社会性が育まれながら、動きを高めようと積極的に運動に取り組み続けたり、他種目の運動に挑戦したりする等、他者と共に運動とのかかわりを深めようとすることができると考える。

そこで、研究の課題分析を踏まえ、以下のような子ども像を設定することにした。

### 《目指す子ども像》 共に運動とのかかわりを深める子ども

また、共に運動とのかかわりを深める子どもとは、以下のような姿になると考える。

- 捉えた運動課題を解決するために、既習の経験や知識、技能を活用し試行錯誤を繰り返し、動きを高め続けようとする姿
- 他者とかかわりながら運動課題を解決するために、できるようになった動きや動きのポイントを他者と伝え合うことで、運動に対する他者の視点を取り入れ多角的に考えたり、他者と協力しながら粘り強く課題解決に取り組んだりする姿
- できなかったことができるようになったことを喜び合い、運動のもつ魅力や価値に気付くことで運動に挑戦し続けようとする姿

また、共に運動とのかかわりを深める子どもとは、以下のような姿になると考える。

このような子どもを育成するためには、捉えた運動課題を解決する過程において、ただ運動を繰り返して動きや技能を身に付けるのではなく、動きのポイント（知識）と技能を関連付けさせながら動きを上げていくことが重要である。そうすることで子どもたちは、他者とかかわりながら動きのポイントを身体運動を通して認識し、新しい運動課題へ出会った際にも、その認識した動きのポイントを活用しながら課題解決を行い、これまでできなかった運動ができるようになり、学習前に捉えていた運動のもつ魅力や価値を再構成し、運動に粘り強く挑戦し続けることができると考える。つまり、体育科の授業においては、他者とかかわりながら身体運動による認識によってもたらされた知識及び技能として動きのポイントを認識させることが重要であると考えられる。

また、上記の目指す子ども像を実現するために、体育科で育成すべき資質・能力を新たな価値を創り出すといった視点で表2のように整理した。

表2 共に運動とのかかわりを深める子どもが発揮する資質・能力

【知識及び技能】	【思考力・判断力・表現力等】	【学びに向かう力・人間性等】
○ 身体運動による認識によってもたらされた知識及び技能	○ 課題を捉える力 ○ 理解を深めるために多角的に考え、必要な情報を選択する力 ○ 伝えたいことを表現する力	○ 自分の思考過程等を客観的に捉える力 ○ 互いに協力する、他者の考えや取組を認める、粘り強く取り組むなどの態度

### 3. 共に運動とのかかわりを深める体育科授業とは

#### 3.1. 共に運動とのかかわりを深めるとは

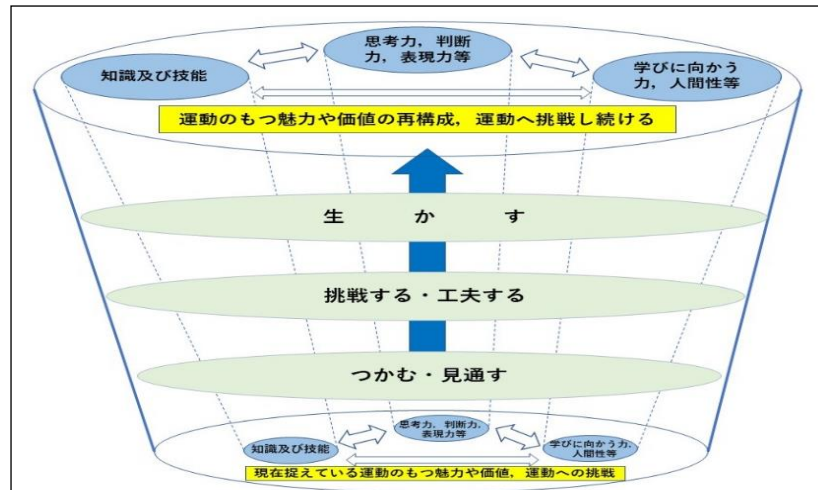


図1 共に運動とのかかわりを深める過程

共に運動とのかかわりを深めるとは、できた喜びや他者とかかわるよさを実感しながら、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が高まり、他者と共に新たな運動へと挑戦し続け、動きを高めようとする状態のことであると考え。具体的には、図1のように課題解決の過程の中で子どもたちは、新しい運動課題を解決するために、既習の経験や知識及び技能を活用し、自分の考えを表現しながら多角的に考え、必要な情報を選択し思考していく。また、他者とかかわりながら試行錯誤する中で粘り強く取り組むことや他者の考えを認めることなどの態度面も同時に育まれていく。さらに、課題解決を通して身に付けた新たな知識及び技能を新たな運動課題へ活用したり日常の動きにつながるような気付きを促したりすることにより、身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能として習得されていく。そして、そのことが運動のもつ魅力や価値に気付き、運動に挑戦し続けていこうとする原動力になると考える。

#### 3.2. 共に運動とのかかわりを深める体育科授業とは

子どもたちが共に運動とのかかわりを深めるためには、運動のおもしろさや魅力に触れさせながら、既習の経験や知識及び技能を生かして動きができるようになる喜びを味わわせ、これまで捉えていた運動のもつ魅力や価値を再構成する授業を目指していくことが必要であると考えた。そのためには、まず、子どもたちが「挑戦してみたい」等と思うような発達の段階や実態を踏まえた教材に出会わせ、試しの運動を通して、自分なりの課題を把握し既習の経験や知識及び技能を基に「～したらできそうだ。」等の見通しをもたせていく。次に、課題を解決するために、体育科の見方・考え方を働かせ、他者とかかわりながら多角的に考え、解決に必要な動きのポイントを選択し、練習

の中で試行錯誤を繰り返す中で「わかる」「できる」を往還しながら選択した動きのポイントを運動を通して認識させていく。さらに、そのことを次の学習へ生かすために、高まった動きの要因等を振り返らせていく。そうすることで、子どもたちが運動する楽しさや喜びを味わい、運動のもつ魅力や価値に気づき、体育科で育成すべき資質・能力がバランスよく育まれていくと考える。

また、課題解決の過程の中で現れる子どもの姿を表3のように想定した。

表3 課題解決の過程で想定される子どもの姿

課題解決の過程	想定される子どもの姿
つかむ・見通す	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 運動教材と出会い、「挑戦してみたい」という意欲をもつ姿</li> <li>○ 試しの運動を通して、自分なりの課題をもつ姿</li> <li>○ 既習の知識及び技能を基に「～の動き方が生かせそうだ」等の見通しを立てる姿</li> </ul>
挑戦する・工夫する	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 課題解決のために既習の知識及び技能を基に、他者とかかわりながら多角的に考え、試行錯誤し知識と技能を関連付けようとする姿</li> <li>○ 他者の考えを認め、粘り強く運動に取り組み続ける姿</li> </ul>
生かす	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分や他者の動きの高まりを喜び合う姿</li> <li>○ 高まった動きの要因を考える姿</li> <li>○ 運動のもつ魅力や価値に気付く姿</li> <li>○ 運動へ挑戦し続けようとする意欲をもつ姿</li> </ul>

#### 4. 共に運動とのかかわりを深める体育科授業創造の基本的な考え方

##### 4.1. 知識及び技能の状態の明確化

共に運動とのかかわりを深める子どもを育成するためには、既習の経験や知識及び技能を活用しながら課題解決し、「わかる」「できる」を往還しながら身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能として習得していくことが大切である。そこで、どのような状態を経て身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能の状態へと至るのかを表4のように設定した。

表4 知識及び技能の状態及び開脚跳びを基にした具体的様相

知識及び技能の状態	開脚跳びを具体例とした様相
【個別の知識及び技能の状態】 一連の動きの中のある局面の動き方がわかり、その局面の動きができるようになる状態	開脚跳びの目指す動きについて絵図や動画をみることで「跳び箱の前方に手を着けばよい」等の動き方がわかると共に、その動きができる。
【一連の動きとしての知識及び技能の状態】 めざす動きの一連の動き方がわかり、初めて一連の動きとしてでき、それ以降偶発的にできる状態	強い踏み切りから跳び箱の前方に手を着き、跳び箱を強く突き放してから両足で着地するといった開脚跳びの一連の動き方がわかると共に、初めて開脚跳びができ、その後、できたりできなかったりを繰り返す。
【身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能の状態】 一連の動きが無意識に自動的にできる状態	開脚跳びが、いつでも、どんな状況でも繰り返しできる。

また、子どもたちが、運動課題を解決し、身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能として習得するためには、表5のような運動課題の解決方法に関する知識も身に付けさせることが大切である。

表5 運動課題の解決方法に関する知識

運動課題の解決方法に関する知識
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 運動観察をする対象に関する知識 例)・変形姿勢やリズム・空間移動のおもしろさ、うまくいかないところ など ・姿勢や体の部位 ・一連の動き など</li> <li>○ 動きを伝える際にどのような伝え方をすればよいのかといった知識 例)・姿勢やリズム、空間を表す言葉を使って、比喩表現や擬態語を使って など</li> </ul>

4.2. 身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能の状態に至るまでの過程

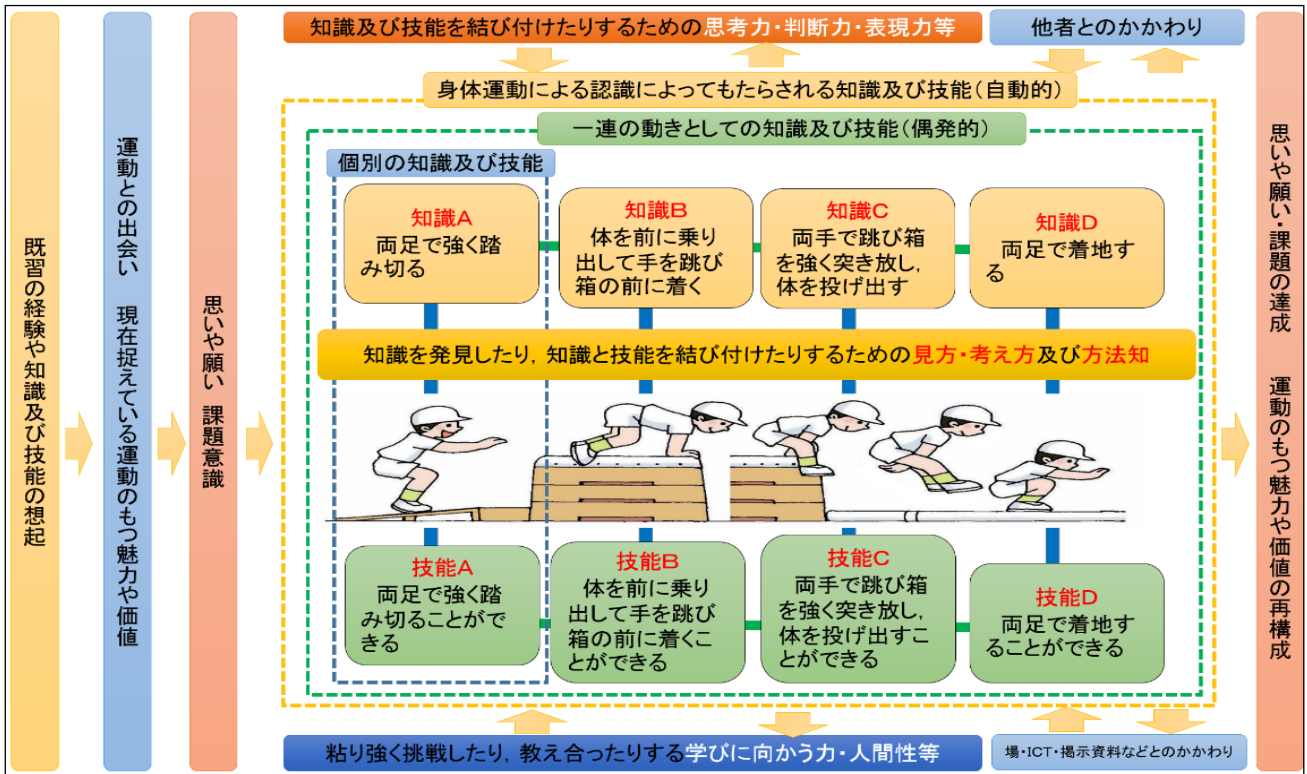


図2 授業における知識及び技能とその他の資質能力との関連

子どもたちが、身体運動による認識によってもたらされた知識及び技能の状態になるためには、図2のように、運動と出会い、課題解決を行う過程で、思考力、判断力、表現力等を発揮し、それに伴って学びに向かう力、人間性等も同時に育まれながら知識と技能を関連付けさせていく必要がある。具体的に「開脚跳び」では、まず、「跳び箱を強く突き放す」等の局面の動き方がわかり、その動きができるようにするために、他者とかかわりながら運動課題の解決方法に関する知識を駆使し課題解決を行っていく。局面の動きを解決する際には、解決する順序はなく、子どもたちの捉えている課題意識に応じて解決していくこととなる。そして、課題となる局面の動きを解決する場で練習したり、練習の場と主運動をする場を行き来したりすることで、動きを修正しながら局面の動きをつなぎ合わせ、一連の動きとしての知識及び技能の状態へと高めていく。さらに、繰り返し練習をしたり動きのポイントや動きが高まった要因を発表したりすることで身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能まで高めていくことができると考える。

このような知識及び技能の状態まで高めていくためには、単元を通して目的を明確にもち、課題意識を連続させながら試行錯誤を繰り返し、知識と技能を関連付けることができるような単元構想が必要になる。また、課題意識を連続させるために、教師の働きかけを具体化していくことも大切であると考えられる。

そこで、本年度は、器械運動領域において以下の2つの点に重点を置いて授業を創造していくこととした。

重点1 共に運動とのかかわりを深める単元構想

子どもが学ぶ目的をもち、知識と技能を関連付けながら知識及び技能の状態を高めていくことができるような単元構想を具体化する。

重点2 課題意識を連続させる指導方法

知識と技能を結び付けながら知識及び技能の状態を高めていくことができるようにするために、子どもの課題意識を連続させていく指導方法を具体化する。

### 4.3. 共に運動とのかかわりを深める単元構想

子どもが共に運動とのかかわりを深めるためには、単元を通して「できるようになりたい。」「上手になりたい。」などの目的を共有しながら課題解決に取り組んでいくことが重要である。そして、その課題解決の過程で他者とのかかわり合い、知識と技能を関連付けながら知識及び技能の状態を高めていくことが重要である。そのためには、以下の図3のように単元を構想していくことが有効であると考えた。

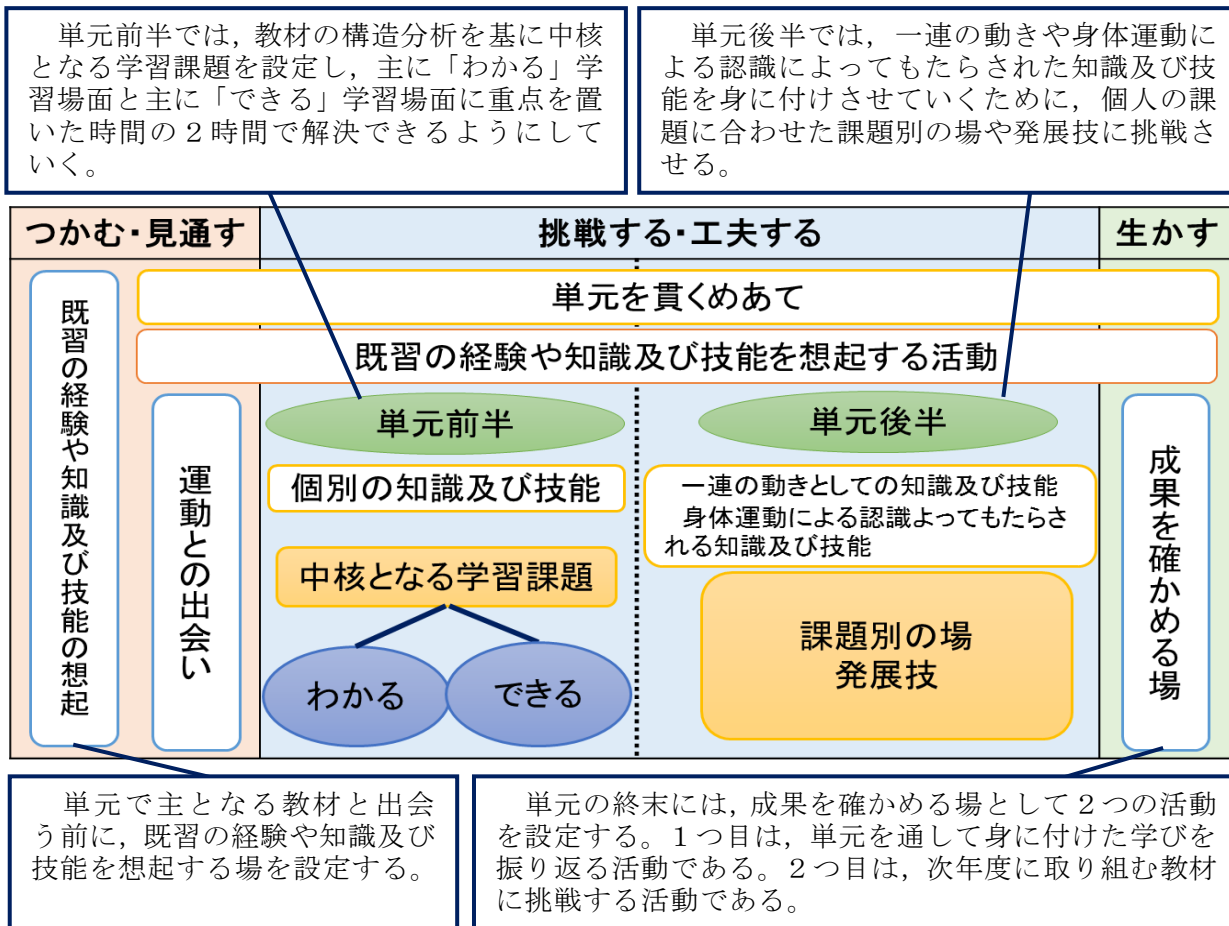


図3 共に運動とのかかわりを深める単元構想の概要

### 4.4. 課題を連続させていく指導方法

前項では、共に運動とのかかわりを深める単元構成について述べてきた。このような単元を構成する中で、子どもたちが、粘り強く課題を解決しながら、共に運動とのかかわりを深めるには、図4のように課題を明確にしなが運動に挑戦し続けていくことが大切である。子どもたち一人一人が課題を捉えることで、自分が「何を」「どのように」解決すればよいのかが明確になり、練習方法などの課題解決の見通しをもつことができるからである。さらに、友達からアドバイスをもらいながら試行錯誤を繰り返し、知識と技能を関連付けていくことにつながるからである。課題を捉えさせ、課題意識を連続させる働きかけは、次の表6の通りである。

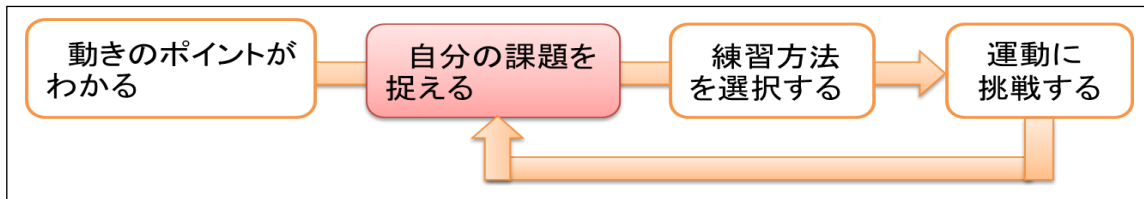





図4 課題を捉え、課題を連続させながら運動に挑戦するプロセス

表6 課題を捉えさせ、課題意識を連続させる働きかけ

<p><b>【課題を明確にする掲示資料】</b>                  授業を始める前に、その時間で解決する課題を明確にするために、運動課題を解決する練習の場に自分のネームカードを貼らせるようにした。そうすることで「何を」「どのように」解決するのか明確にすることができる。</p>	 <p>課題と練習の場を結び付けた掲示を準備し、子どもたちが自分が練習する場を選んでネームカードを貼らせるようにした。</p>
<p><b>【他者評価・ICT活用】</b>                  自分の課題を把握するために、視点や観点を明確にして、他者から運動を見てもらって出来栄を伝えてもらったり、タブレットや映像遅延装置などのICTを活用して自分の動きを客観的に振り返ったりするようにした。</p>	 <p>同じような課題をもった子ども同士でペアになり、互いに動きを見合っただバイスするようにした。</p>
<p><b>【学びの成果や過程を振り返る活動】</b>                  自分の課題を明確にするために、授業の終末で以下の視点で自分の学びを振り返るようにした。                  「何ができるようになったのか。」                  「どのような解決方法を選んだのか。」                  「次時の課題は何か。」</p>	 <p>できるようになったこととその理由、次時の課題を記入させていった。書くことで課題を明確に捉えていた。</p>

5. 実践

5.1. 実践の基本的な立場

本実践では、設定した2つの柱「単元構成」「指導方法」が本単元の目標を達成する上で有効だったのか検証するために行った。

表7 実践の基本的な立場

<p>単元構成</p>	<p>□ 単元構成の工夫を図ることで、子どもが課題意識を連続させて既習の経験や知識及び技能を関連付けたり、活用したりしながら、知識及び技能の状態を高めることができたか。</p>
<p>指導方法</p>	<p>□ ICTを活用したり、他者評価を取り入れたりして、子どもの課題を明確にすることで、練習の場と主運動の場を行き来しながら粘り強く課題解決に取り組むことができたか。</p>

5.2. 単元の目標

表8 単元の目標

<p>知識及び技能</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>両足で強く踏み切って体を投げ出したり、跳び箱を突き放して両足で着地したりするなどの開脚跳びの跳び方がわかる。</li> <li>両足で強く踏み切って体を投げ出したり、跳び箱を突き放して両足で着地したりして開脚跳びを跳ぶことができる。</li> </ul>
<p>思考力・判断力・表現力等</p>	<p>実際に動いたり、友達の動きを見たりして発見した開脚跳びのコツや、目指す動きと課題となる動きを比較してつかんだ課題や練習方法を友達に伝えることができる。</p>
<p>学びに向かう力・人間性等</p>	<p>「跳ぶことができるようになりたい。」「みんなでアドバイスし合っていきたい。」などの思いや願いをもって挑戦し、できるようになった動きの高まりを振り返ったり、規則を守って安全に気を付けたりしながら、友達と協力して運動に粘り強く取り組むことができる。</p>

5.3. 指導計画

表9 指導計画

時間	1	2	3・4・5・6・7	8・9 (本時)	10
過程	つかむ・見通す		挑戦する・工夫する		生かす
課題の追究過程	これまでに学習した動きで楽しもう。	開脚跳びに挑戦して、学習計画を立てよう。	開脚跳びのコツを発見して、アドバイス合って、クラス全員が跳ぶことができるようになって跳び箱名人を目指そう。 開脚跳びのコツを発見しよう。 跳び箱の前に手を着くにはどうしたらよいのだろう。 跳び箱を跳び越すには、どうしたらよいのだろう。	大きく跳ぶために、課題に合った場で練習しよう。	開脚跳び発表会をして、学習のまとめをしよう。
	想起の場		わかる・できる時間で解決する場	課題別の場	成果確認の場

5.4. 本時の実際【9/10時】

表10 本時の実際

**ねらい** 大きく跳び越すための課題を把握し、課題を解決するための練習の場と開脚跳びの場を行き来したり、他者とアドバイスし合ったりすることを通して、大きく跳び越すことができる。

**課題を解決して、大きく跳び越すことができるようになる。**

この時間で〇〇くんが解決する課題は何かな。      僕の課題は、跳び箱を強く押すことです。

**課題 強く跳び箱を押すこ**

課題に合った練習の場を選んだり、友達とアドバイスし合ったりしよう。      僕は、跳び箱を強く押すことが課題なので、2段跳び箱で練習をするぞ。

〇〇くん、かなり強く押すことができるようになっていぞ。

**他者評価**      **練習の場**

動きを見てみると、強く押すことができているぞ。もっと前に跳ぶとよさそうだ。

**ICT活用**      **主運動の場**

大きく跳び越すことができたのは、なぜですか。

動きの高まりを実感      高まった要因を表出      コツを生かしたり、練習の場を選んだり練習したり、アドバイスをもらったからです。

**コツを生かしたり、練習の場で繰り返し練習したりしたから大きく跳び越せた。**

次の時間は、助走を生かして、強く踏み切る(次時の課題)と大きく跳ぶことができそうだな。



## 5.5. 結果と考察

表11 結果と考察

子どもの姿	
要因（単元構成）	要因（指導方法）
<p>上記のような子どもの姿が見られた要因は、第1時や単元を通して既習の経験や知識及び技能を想起する活動を設定して開脚跳びにつながる類似運動を経験させ、「できそうな感じ」につながる感覚を身に付けさせたことや単元後半に課題別の場を設定して、自分の課題に合った場で身に付けてきた知識及び技能を生かして課題解決を図ったことが挙げられる。</p>	<p>上記のような子どもの姿が見られた要因は、自分の解決すべき課題を明確にもって課題解決に取り組むことができるように、タブレットや映像遅延装置を活用して、自分の動きを客観的に振り返る方法を用いたことが挙げられる。また、異質グループや等質グループをつくって、動きを見合い、アドバイスする活動を設定したことが挙げられる。</p>

## 6. 研究の成果と今後の方向性

## 6.1. 実践の成果

体育科で育成すべき資質・能力を新たな価値を創り出す視点で整理し、それらを育成するために、子どもに習得させていく知識及び技能の状態を明らかにすることができた。このことで、子どもをどの状態に高めていくのか教師が明確にもち、学習指導を展開することができた。

既習の経験や知識及び技能を想起する場を設定したり、単元後半に課題別の場や発展技へ挑戦する活動を設定したりするなどの単元構成やICTや他者評価を活用して課題意識を連続させるような指導方法の工夫を図ることで、子どもを身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能の状態に高めていくことができ、運動のもつ魅力や価値を実感する姿が見られた。

## 6.2. 今後の方向性

共に運動とのかかわりを深めていく子どもを育成するための学習内容の要件を明確にする必要がある。

子どもの既習の経験や知識及び技能を関連付けながら身体運動による認識によってもたらされる知識及び技能の状態に高めていくための発問や場の設定等の指導方法を具体化する必要がある。

## 7. おわりに

これから、子どもたちが生きる時代は、人工知能の飛躍的な進化に伴い、様々な人間的活動が人工知能に代替され、生活・労働のほとんどが「身体」から乖離していく状況となる。このような時代において、体育科では、どのような資質・能力を子どもたちに育成すべきか議論を重ねてきた。その結果、私たちが整理した共に運動とかかわりを深める子どもに育成を目指す資質・能力の中核

は、知識及び技能の高まりや学びに向かう力・人間性等の高まりによる「身体性」「社会性」である。これらの2つを中核にしながら、運動のもつ魅力や価値を再構成することによって仲間と共に運動とかかわりを深める子どもの育成を目指していきたい。

#### 付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成25～30年度研究紀要で発表した体育科の研究内容等に基づき、実践を行い、その研究成果をまとめたものである。

#### 謝辞

本報告は、鹿児島大学理事・副学長の武隈晃先生、鹿児島大学教育学系講師の與儀幸朝先生に多大なご支援をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 鹿児島大学教育学部附属小学校編（2013） 個の確立を目指す授業の創造Ⅰ，平成25年度研究公開冊子  
鹿児島大学教育学部附属小学校編（2014） 個の確立を目指す授業の創造Ⅱ，平成26年度研究公開冊子  
鹿児島大学教育学部附属小学校編（2015） 個の確立を目指す授業の創造Ⅲ，平成27年度研究公開冊子  
鹿児島大学教育学部附属小学校編（2016） 個の確立を目指す授業の創造Ⅳ，平成28年度研究公開冊子  
鹿児島大学教育学部附属小学校編（2017） 個の確立を目指す授業の創造Ⅴ，平成29年度研究公開冊子  
鹿児島大学教育学部附属小学校編（2018） 個の確立を目指す授業の創造Ⅵ，平成30年度研究公開冊子  
文部科学省（2008） 小学校学習指導要領解説体育編，東洋館出版社  
高橋健夫・立木正・岡出美則・鈴木聡編著（2010）新しいボールゲームの授業づくり，体育科教育別冊  
三木四郎（2005）新しい体育授業の運動学 明和出版  
友添秀則・岡出美則（2005） 教養としての体育原理 大修館書店  
岩田靖（2016）体育の『見方・考え方』—その内実を問う，体育科教育 大修館書店  
岩田靖，吉野聡，日野克博，近藤智靖 編著（2019）初等体育授業づくり入門 大修館書店  
田村学（2018） 深い学び 東洋館出版  
岩田靖（2012） 体育の教材を創る．大修館書店